NRI学生小論文コンテスト2014　入賞論文

高校生の部

高校生の部　テーマ

世界に向けて未来を提案しよう！

創りたい未来社会
あなたの夢とこだわり

世界はいつもさまざまな課題を抱えています。
先人たちはこうした課題の解決にチャレンジし、科学・技術だけでなく、
社会制度、芸術文化、教育スポーツなどの分野でイノベーションを起こして、
よりよい社会の実現に貢献してきました。

先人たちのこうした偉業は、多くの人たちの協力によって実現していますが、
その発端はひとりの、あるいはほんの少数の人たちの想いや創意工夫から
始まったものが少なくありません。
「こういう社会が実現できたら…」、「こんなことが可能になったら…」など、
夢を描き、それを実現するための強いこだわりを持ち続け、行動することが、
社会の発展や世界を変えることにつながっているのです。

さて、あなたには、現在の日本や世界がどのように見えていますか。
あなたは、未来に向けてどのような夢を描きますか。
また、どのような“こだわり”を持って、その夢を実現したいと思いますか。

NRIは、あなたが夢とこだわりを持ち続けることが、よりよい未来社会を創る
原動力になると信じています。
あなたの経験や体験に基づく強い想いや、常識にとらわれない柔軟な発想を
元にした論文の応募をお待ちしています。

*入賞論文は基本的に原文をそのまま掲載していますが、一部、表記統一などの調整をしています。

大賞［高校生の部］

戦争や貧困に苦しむ海外の同世代の子どもたちを救いたいという、筆者のこだわりや強い思い、課題意識の掘り下げ、提案の具体性・実効性が高い評価につながりました。

さくらんぼネットワークの構築
――世界を救い、日本を変える

神戸朝鮮高級学校２年
韓 大鏞 はん てよん

私の創りたい未来社会は、世界をリードする元気で活力に満ちた日本である。

日本の最も深刻な問題は超高齢社会化であり、少子化である。就業年齢に当たる人口の減少は経済発展を妨げるだけではない。いつの時代でも若者たちが新しい文化を創造し、よりよい社会を創るために身を挺して戦ってきた。若者たちが生き生きと活躍できる社会は、高齢者も幸せに暮らせる社会である。しかし、日本の若者の数を今すぐ増加させることは不可能であり、手品のように出生率を高めることは難しいであろう。

私の提案は「さくらんぼネットワーク」の構築である。これは13歳から17歳、日本の学齢でいうと中高生にあたる若者たちを世界中から日本に呼び、勉強してもらおうというものだ。

文部科学省は2008年に、2020年を目途に30万人の留学生受け入れを目指すとしている[1)]。留学生というのは、おおむね18歳以上を指し、彼らは日本で高等教育を受けることを目的としている。

私は、ここで新しい発想を提言したい。それは世界の13歳から17歳の10代半ばの若者たちに、日本で教育を受けてもらおうというものだ。日本は少子化による若者の数の減少で悩んでいる。しかし、世界に目を向けると、貧しさや戦乱で、学校にも通えない子供たちが数多く存在する。今日の命が保障されない社会で、明日の食事の心配をしなくてはいけない子供たちを、日本が救おうというのが第一の目的である。日本国憲法の前文には、「われらは平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」と明記されている。私はこのように素晴らしい憲法を持っている日本人が羨ましい。

今朝の新聞でも、パレスチナのガザで何の罪もない子供たちが命を落としていると報道されている。アジアやアフリカでは多くの子どもたちが重労働を強いられている。今こそ日本が「国際社会において名誉ある地位」を占める時であろう。69年間、平和を守りぬいてきた日本であるからこそできるのが、この「さくらんぼ計画」である。

現在、日本には「さくらネットワーク」というものがある。これは国際交流基金が海外日本語教育拠点の整備拡充を実現するため、世界各国の中核的な日本語教育機関を構成メンバーとしたものであり、2011年8月現在、43カ国116拠点で展開している[2)]。現在、日本の国際協力NGOは400以上あるといわれ、世界100カ国以上で活躍しているという。そのほとんどの組織で子どもたちへの教育支援が行われている。このNGOやNPOを「さくらんぼネットワーク」で繋いでいくのだ。現地に学校を建て、給食を配り、学用品を与えるというサポートは必須である。しかし、13歳ぐらいになると学校を終え、そのまま社会に出るしかないという子供たちが圧倒的多数である。読み書きを教えることは、子供たちの生きる力の源である。しかし、そこで教育支援を終えてしまうのは、あまりにも惜しい。

まず、各NGOやNPOの協力を得て、世界各地から日本で学ぶ希望者を募る。いろいろな国で、さまざまな事情を抱えた子供たちを選別することは、非常に難しいことである。まず、命の危機から救うこと。そして、残された家族にも納得してもらい、新しい未来を創るためにさくらんぼたちを日本に呼ぶ。さくらんぼたちの労働による収入が生活に不可欠であるという場合は少なくないであろう。さくらんぼたちは、日本でも学びながら簡単な労働（アルバイト）に従事する。その報酬の一部を家族に送金できるようにすれば、残された家族には大きな助けとなる。

各地で集められたさくらんぼたちを、日本ではボランティアで募った家庭で受け入れる。そして中学校と高校の各学年に1クラスずつ「さくらんぼ組」を設け、ここでは1年間で日本語を習

得することを目標とした授業を行う。今、日本全国の公立の中学や高校では、空き教室が毎年のように増加している。生徒数の減少で悩んでいる学校を優先して、さくらんぼたちを学ばせるようにすることが望ましい。13歳から17歳までの若者たちがひとクラス増えただけでも、学校はもちろん、その地域の雰囲気も大きく変わることは間違いないであろう。

学校では、1年間の日本語教育を柱とした授業を中心に、学校行事や部活動にも日本人の生徒と全く同じように参加させていく。このぐらいの年齢になると、日本人生徒や外国人生徒の考え方の中にも、言われのない先入観や偏見などがあることが考えられる。まだその芽が小さいうちに摘むには、同じ学校で共に学び、歌い、汗を流すことが最も効果的だ。私自身、在日コリアン3世として、たくさんの日本の友人と親しくなれたのは、バスケットボールのおかげだと確信している。知らないことが不安を生み、不安が偏見を育てるのだ。そして、さくらんぼたちは2年目から日本人生徒と同じクラスで学ぶようにする。

さくらんぼたちと仲良くなった日本人の子どもたちは、家庭に戻り、家族に彼らのことを伝えるであろう。ホームステイ先の大人たちも、彼らと共に生活することで貴重なものを得ることができる。寂しかった夕食時にも笑いが起こり、誰もいなかった部屋にも灯りがともる。さくらんぼたちは、故国と日本に2つの家族ができることになる。そして、中学と高校の学区が中心となり、若者がいなかった町にも賑わいが戻る。人手不足で悩んでいた店舗には、さくらんぼたちがアルバイトとして元気に勤めることにより、活気が生まれるであろう。部員不足で試合ができないような部活も、さくらんぼたちの入部により、どんどん試合に出場することができるようになる。17歳になり、高校卒業を控えたさくらんぼたちは、故郷に帰るか、日本で就職するか、進学するかを選べるようにする。故郷に戻ったさくらんぼたちには、日本で学んだ日本語の力を地元で発揮し、次の新しいさくらんぼたちが日本に渡るまでのサポーターとして活動してもらう。日本に残る場合には、彼らが自由に働けるような資格を与える。日本語が自由に操れるようになった10代の若者たちの増加は、日本経済を飛躍的に発展させることが予想される。日本の社会に出たさくらんぼたちは、会社や工場、商店で、そして農園や漁場で、逞しく働くことであろう。さくらんぼたちの最も大きな特徴は、彼らが日本語を話せるということである。

ことばが正しく通じてこそ、お互いの考えや気持ちが理解でき、お互いを思いやれるのである。さくらんぼたちは、日本語ができるだけではない。同じ年代の日本人の子どもたちと、同じ空間で、同じ時間を過ごした「ともだち」であり「なかま」でもある。10代の多感な時期を共に過ごした経験は何物にも代えがたい連帯感を生む。これは、この後、何年、何十年経っても、深まりこそすれ決してなくなることのない貴重な宝物となる。そして、さくらんぼたちと共に育った日本人の若者たちは、それ以前の世代とは、明らかに違ったグローバルな視野を持った日本人として社会を担っていくであろう。

参考文献

1) 文部科学省ホームページ「留学生30万人計画」骨子の策定について
2) 文部科学省「留学生30万人計画の進捗状況について」平成23年8月現在

［受賞者インタビュー］

考えを論文に まとめることができたこと、受賞できたことが嬉しい

――コンテストに応募したきっかけは？

学校の掲示版に貼り出されていた募集ポスターを見て、担当の先生にチャレンジしてみたいと伝えました。

――論文を書き上げるまでにどのくらいの時間がかかりましたか？

夏休みに、バスケ部の部活の前後の時間を使って、うんうん唸りながら書きました。

――この論文を書いたことで良かったことは？

今まで「こうなればいいのに」と頭の中で思っていたことを小論文という形にできたことが、何よりの喜びです。大きな賞をいただき、いつも迷惑ばかりかけている母に少しは恩返しができたかなと思います。

――今、どんなことをしている時間が楽しいですか？

今まで以上に本を読むことが好きになりました。今まで興味がなかった政治や経済をテーマにした本も読むようになりました。表彰式で審査委員の方々がお話しされていた、「人生が変わるかもしれない」コンテストだという言葉が耳から離れません。

優秀賞［高校生の部］ 東南アジアの自然破壊問題と日本の里山保全の仕組み「アグロフォレストリー」を結び付けた視点が、グローバルで独創的。論文としての完成度の高さも評価されました。

「アグロフォレストリー」
――日本と東南アジアの掛け橋

宮城県宮城野高等学校 2年
菅野 康弘 かんの やすひろ

「83%」この数値は何を示しているのか？

これは、東南アジア全体の熱帯林焼失面積がアジア・太平洋地域全体の熱帯林焼失面積に占める割合である。この数値を調べた理由は、学校の授業で世界の森林事情について触れた際に興味を持ったからだ。調べる前は、地球温暖化・熱帯林の減少というと、砂漠化やアマゾン川流域の問題という印象が強かった。しかし、世界の裏側でなく、もっと身近な所で、自分が想像していた以上に大きな影響を与えていることに驚いた。それと同時に「東南アジアの森林破壊の進行を止めなければならない」と強く思った。そこで、自然を利用しながら、自然を残す形の社会、つまり「環境を保全し、人と共生できる社会」を、私の考える創りたい未来社会として提案したい。

東南アジアの現状と未来、そして課題とは

まず、東南アジアの現状として、各国の森林面積が年間約1～3%ずつ減少していることが挙げられる[1)]。森林が減少する理由は様々だが、主なものとしては土地利用の変換、燃料木材の過剰な摂取、違法伐採が挙げられる。このような森林伐採が起こる原因は、資本主義に則った「目先の利益」を優先するからである。この現状が今後どう変化していくのか推測してみると、現在と同様に森林面積が年率約1～3%減少することにとどまらず、大幅な人口増加により更に土地や資源が必要となり、森林面積の減少に拍車がかかる可能性が高いと推測できる。これが現段階での東南アジアの環境における問題点であると私は考える。

問題解決とアグロフォレストリー

では、問題解決のためには何をしたらよいかと考えていた時、私は日本の里山保全の仕組みである「アグロフォレストリー」という言葉に出会った。「アグロフォレストリー」とは、環境省のホームページによると、「1つの土地から林産物も農産物も、さらには畜産物も水産物も収穫しようとする、複合的な土地利用の一形態である」と定義されている。現在、日本の里山の保全活動は里山に農地を作り、農産物と林産物と水産物を収穫する形である。この仕組みが最も自分の考えた未来社会に近い形の仕組みであるように思え、この仕組みを活用することで、東南アジアの森林問題を解決できるのではないかと考えた。

問題解決の方法として「アグロフォレストリー」を採用した理由は3つある。1つ目は、複合的な土地利用形態により、様々な収穫物が得られるため、天候不良などによる凶作のリスクが分散し、1年を通して収入を得る安定性が増すからだ。2つ目は、東南アジアの熱帯林の生物種の多様性を保全することができること。3つ目は熱帯地域の日照時間や気温、水といった第1次産業を活発化させる条件を満たしていることが挙げられる。つまり、環境に配慮した森林保全と地域の人々の豊かな生活の両立が可能なことが、その理由である。

理想的に思えるこの「アグロフォレストリー」だが、実現するためには大きな課題を解決しなければならない。それは、東南アジアの土地が過剰な伐採などの影響により、すでに荒廃していることだ。現在、東南アジアの第1次産業は、単一の品種を多量に育て輸出するプランテーションを主流としている。その中には木材も該当し、成長の早い品種ばかりを育て、「目先の利益」を得ようとしている。そのため、木材を収穫することに精一杯で土地の回復にまで手が回らず、土地はやせていくばかりである。「東南アジアの森林減少の要因と進む対策」（樫尾昌秀 著／FAOアジア・太平洋地域森林資源官）によれば、このような土地を再生させるためには木片やおがくずを土にばらまき、腐敗を進行させ、栄養価の高い腐葉土にする方法が発見されているが、現地でそれらの材料すべてをまかなうのは難しい。

では、どうしたらよいかと考えた時、ふと、日本の里山の風景が思い浮かんだ。少し前まで日本の里山は、豊かな土壌と清らかな水流に適度な人の手が加わって、美しい景観が保たれ、多

くの日本人の原風景となっていた。しかし、現在その里山は過疎化によって美しい姿を維持することが難しくなり、荒廃した土地となっているところが多く、今後更に多くの里山が荒廃していくことが懸念されている。里山を美しく維持するためには、適切な間伐などを行う必要があるが、日本ではその間伐材を使う用途も、間伐を行う人材もないため、そのまま放置されているのが現状だと聞いた。その放置されている間伐材を、腐葉土を作るための木片やおがくずに使わない手はない。日本と東南アジアに掛け橋を渡すことで、日本の美しい里山が、東南アジアの美しい自然が蘇るのではないか、私はそう考えた。

以下、私の考えた掛け橋の仕組みを説明する。まず、現在過疎化している日本の里山に、東南アジアで農業・林業に従事する人材を研修生として受け入れる。彼らには日本で農業・林業に従事する傍ら、里山の整備として間伐を行い、その木材を木材チップに加工してもらう。次に、彼らの作った木材チップを東南アジアに送り、現地の荒廃した土地にばらまき、腐葉土を作る。そうすることで、「アグロフォレストリー」の形態に適した土壌を再構築していく、というものだ。

この仕組みが実現すれば、日本の里山が再び整備され、美しい景観が保たれるだけでなく、農作物の生産効率も向上する。また、里山に人口が増えることで地域の活性化にもつながるだろう。対して、東南アジアの国々では、無償で豊かな土壌を手に入れられるだけでなく、農業・林業の研修も積むことができると考えた。

残された問題点と私の夢とこだわり

当然のことだが、「アグロフォレストリー」導入のための障害はこれだけではない。第1次産業であるため、そして自然を相手に計画を進めていくため、時間がかかってしまったり、天候に左右されてうまくいかなかったりするということや、発展途上国なので技術が発達していなくて急速な改革ができないということもある。さらに、その荒廃した土地にも、所有権・利用権・土地の税金が存在することも忘れてはならない。このような障害が存在するのも確かだ。だが、それらを解決または軽減する方法を私は知っている。

それは、地方公共団体とNPO・NGOがタッグを組んで、里山を保全しようというものだ。自然を守るというと誰かが我慢を強いられるという印象が強いが、私は自然も人も皆が豊かになれること、これにこだわりたい。そして、私は将来この活動に参加したいと考えている。そこで私は「東南アジアの森林を保全する団体」を立ち上げ、有志を募り、現地に赴き、東南アジアの荒れた土地を「アグロフォレストリー」に適した豊かな土壌に作り変えるプログラムを推進する仲介人となりたい。

私は、「アグロフォレストリー」には高度な科学文明に裏打ちされた大量生産・大量消費の資本主義経済システムの中に生きる先進国の人々とは少し異なった、新しい豊かさを実現する可能性があると考え、新たな豊かさの価値を見い出すことができると信じている。

文中注

1) 樫尾昌秀（FAOアジア・太平洋地域森林資源官）「東南アジアの森林減少の要因と進む対策」
http://www.gef.or.jp/forest/kashio.htm

参考文献

・環境省 自然環境局自然環境計画課ホームページ「国際的な森林保全対策」
http://www.env.go.jp/nature/shinrin/index_1_2.html
・丸山聡司「アジアの熱帯林破壊と日本の関係」、敬和学園大学「VERITAS」学生論文・レポート集 第8号、2001年7月

［受賞者インタビュー］

**本を読んで
もっと知識を蓄え、
自分の興味・関心を
広げていきたい**

――コンテストに応募したきっかけは？

昨年も応募しましたが、入賞することすらできず悔しい思いをしました。今年こそはリベンジしたいと思い、応募しました。

――論文を書き上げるまでにどのくらいの期間がかかりましたか？

約1カ月半です。夏休み前に「創りたい未来社会」を考え始め、夏休みに小論文の草案を作り、8月下旬に修正しました。

――この論文を書いたことで良かったことは？

たくさんの書籍を読んで、知識が蓄えられたことです。今までの日常生活の中で、自然現象や森林破壊についての本を読む機会が少なかったので、自分の興味・関心事が増えました。

――今、どんなことに興味を持っていますか？ どんなことをしている時間が楽しいですか？

「環境工学」という学問で、自然現象が我々の生活にどんな影響を与えているかを調べることです。知識が蓄えられていく感覚が心地良いので、読書をしている時間が好きです。

優秀賞［高校生の部］ 今日的で切実な社会問題に真向から取り組んだ、勇気ある提案。解決策の実効性、子どもの笑顔が溢れる社会を作るという筆者のこだわりや強い思いが共感を集めました。

子どもの笑顔が溢れる社会
――ネットいじめ解決への提案

大阪府立佐野高等学校 3年
谷口 今日子 たにぐち きょうこ

「笑ってあげなさい。笑いたくなくても笑うのよ。笑顔が人間に必要なの」

これは、カトリック教会の修道女であるマザー・テレサの言葉だが、彼女は笑顔を作ることで世界が変わると考えた。彼女の言う、世界を変えるといった大きな話ではなくとも、笑顔には様々な効果がある。笑顔でいることで副交感神経が活発化してリラックスした状態を保つことができたり、良好な人間関係を築いたりすることにも役立つ。つまり、笑顔は人々の生活を豊かにする源である。

しかし、様々な理由から、笑いたいけれども笑うことができない人もいる。例えば、その理由の1つが「いじめ」である。私も小学生の時は、いじめに苦しむ子どもの1人だった。仲の良かった友達から無視され、私に話しかけてくれる友達はいなくなり、私物がトイレに投げ捨てられていたり、私の席がなくなっていたりということが日常茶飯事のように行われた。両親や担任の先生に言うことも出来ず、耐え凌ぐことしかできなかったが、そんな私に気づいてくれて手を差し伸べてくれる先生がいた。その先生が「よく頑張ったね」と、笑顔で声をかけてくれた時は涙が止まらなかったが、先生の笑顔は私の心を穏やかにさせ、いじめに立ち向かう勇気を与えてくれた。同時にその時私は、この先生のような教師となって、同じようにいじめに苦しむ子どもたちを助け、そして子どもたちを笑顔にできる存在となり、笑顔の大切さを伝えていきたいと強く思ったことを覚えている。

現代の教育現場でも、いじめ問題はとても深刻なものとなっている。近年では、スマートフォンの普及等もあり、インターネット上で行われる「ネットいじめ」というものが急速に増加してきた。ネットいじめは、ネット世界がいかに作られたものであっても、架空の世界では終わらず、リアル世界と必ず接点を持っており、そのことを子どもたちもよく知っているので、ネットいじめには逃げ場がないと言われる[1)]。

中でも、日本で約5,000万人が利用しているLINEを用いたいじめ事件の報道が目につき、深刻化していることがうかがえる。友達同士でメッセージや写真などを気軽にやり取りできる便利なものである一方、1人だけメッセージを読めないように設定したり、メッセージをすぐに読んで返信しないと既読無視と言われて仲間外れにされたりするが、加害者本人は相手の顔が見えずボタン1つで簡単にできるので、悪いことであるという認識が甘かったり、外部から閲覧できないように制限されたりするために、見えないところでネットいじめが増加しているのが現状である。

こうした状況に対して国は、携帯電話の学校への持ち込み禁止を提案したり、フィルタリングサービスをつけることを義務化したり、解決に向けて取り組みを行ってはいるが、その程度でネットいじめがなくなり、苦しんでいる子どもたちを笑顔にすることができるとは到底思えない。文部科学省も「ネット上のいじめに関する対応マニュアル・事例集（学校・教員向け）【概要】」を平成20年1月に出しているが、その後新たに出てきたネットいじめの内容には対応できておらず、十分なものとは言えない[2)]。

では、こうした状況の中、どのようにすればネットいじめをなくし、ネットいじめに苦しむ子どもたちを笑顔にすることができるだろうか。私はこの解決策として2点提案したい。

1点目は、これまでも業者に委託して、インターネット上でいじめの発端となりそうなことをいち早く見つけ、子どもたちがトラブルに巻き込まれるのを未然に防ぐネットパトロールが実施されてきたが、「教師によるネットパトロール」を実施するということである。先生方の中には、「自分はTwitterやLINEは使わないからわからない」と仰る人もいるが、子どもが利用しているものを知らずに子どもをネットいじめから救うことはできないはずだ。そのために、各都道府県・市町村の教育委員会には予算を組んでもらい、先生方全てにTwitter等の利用方法や特徴について

学んでもらう。さらには、ネットパトロールを仕事としている企業から講師を招き、ネットパトロールのノウハウを身につけてもらう。このようにして教師自らがネットいじめに気を配ることで、気付けることが増えると考えられ、また、教師の目が及ぶという危機感が子どものいじめ行為への抑止力となることが期待される。

2点目は、教育カリキュラムの中に、必修科目として「コミュニケーション」という授業を導入することである。ネットいじめはインターネットを媒介にしていじめ行為が行われるが、そのインターネットを使用する私達のコミュニケーション能力の不足も大きな要因と考えられる。近年、若者のコミュニケーション能力が低下していると言われ、対面してのコミュニケーションもままならない人がいる中で、インターネット上の書き言葉の文字情報から相手の気持ちを推し量ったり、あるいは相手の立場で物事を考えたりするというのは難しいことなのかもしれない。言葉はすごい道具で、人を喜ばせたり怒らせたり様々な働きをするが、書き言葉の文字情報だけで正確に意思を伝えることは至難であり、これはコミュニケーションという点では弱点である[3)]。そこでこの授業では、互いに顔を合わせて自己紹介をするといった簡単なコミュニケーションから始め、LINE等の書き言葉の文字情報から情報を読み解く場合と対面して情報を読み解く場合とでは、内容の理解に差があることを実感する等といった体験型の授業形式を取る。必修科目とすることで全学校が行うことになるため、近くの学校と連携して、例えば各学校の生徒が混じったグループを作成し、実際に顔を合わせてコミュニケーションを取りながらネットいじめをテーマに設定してグループ発表を行うことで、見知らぬ人と上手にコミュニケーションを取っていく術を学ぶことができ、また、ネットいじめについての知識を得るといった効果も期待できる。

これらの提案は、勿論社会の仕組みを変えていかなければ実現することはできない。しかし、それが可能となった時に私自身がこうした提案を実行できるよう、高校卒業後、私は情報学や心理学、教育学等を総合的に学べる大学に進学し、インターネットに関する豊富な知識とスキルを身につけ、大学卒業後は教師として学校現場でネットいじめに苦しむ子どもたちを救い、その子どもたちを笑顔にしてあげたい。

子どもの笑顔が溢れる社会を創ることができれば、その子どもが成長して大人になった時、きっとその社会もまた笑顔が溢れる社会になっているのではないだろうか。これからの子ども、そして、いつか母となり自分の子どもが過ごす社会がそうした笑顔が溢れる社会となるように、私はこれから夢に向かって一歩一歩努力していく。

参考文献

1) 加納寛子「リゾーム的に増殖するネットいじめ」『現代のエスプリ』第492号 pp.40-53、至文堂、2008年
2) 文部科学省「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアル・事例集（学校・教員向け）【概要】、2008年 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/11/08111701/001.pdf
3) 赤堀侃司「学校における情報モラル教育のあり方」『児童心理』2008年10月号臨時増刊pp.114-119、金子書房

［受賞者インタビュー］

論文を書いて応募したことで、過去の経験を越えて強くなれた

――コンテストに応募したきっかけは？

学校の先生に勧めていただきました。大学ではレポートや論文を書く機会が増えるので、その練習と思い、応募することにしました。

――論文を書き上げるまでにどのくらいの時間がかかりましたか？

先生に添削指導していただいた時間も含めると、完成まで1～2週間ほどかかりました。

――この論文を書く上で苦労したことは？

2,500字程度という長い文章を書くことに慣れておらず、読み手に強く印象を残せるような文章を考えるということもほとんど経験のないことで、とても苦労しました。

――この論文を書いたことで良かったことは？

自分が過去にいじめに遭っていたという経験を晒すことはとてもためらいましたが、そのためらいを越えて、こうして論文を書いて発表できたことは、今までの自分より強くなれた気がして良かったです。

――今、どんなことをしている時間が楽しいですか？

小説を読むことが自分の今の楽しみです。本を読むことで自分の知識を増やすことができますし、小説を読み、その物語に没頭している時が一番楽しいと感じます。

特別審査委員賞
［高校生の部］

【世界 -World-】の授業を世界規模で行うという発想は、雄大で夢があり、カリキュラムの具体性も併せて、未来への提案として非常に魅力的であるとして審査委員の心をつかみました。

世界中の子供たちがつながっていく

佐賀県立武雄高等学校 2年
野田 かれん のだ かれん

「グローバル化しよう」と日本では最近多く言われていますが、日本にはその体制が整っているのでしょうか。日本社会がどんどん国際的になっていく中で、私たちは本当に「国際化」を理解しているのでしょうか。私が気になったのは日本人と外国人の関係です。

私は今年の7月までドイツに1年間語学留学をしていました。そこで体験したのはアジア人とヨーロッパ人という人種の違いです。私はあらゆる面で外国人であるという扱いを受けました。それ以来、私は外国人という言葉の意味と差別についてより深く考えるようになりました。差別といっても種類はたくさんあります。肌の色で人を差別する。最近のニュースで白人の警察官が黒人の容疑者を射殺したことが大きな問題になるのも、差別に一因があります。また、世界規模で話をすると言語、文化や宗教など、違いはとても多く、差別も多く見つかるでしょう。

私は、人が差別をしてしまう原因は無知ではないかと考えました。その理由となったのが、私のヨーロッパでの体験です。街に行くと、私は日本人ではなくアジア人として見られます。そしてすれ違いざまに「中国は最悪の国だ」「アジアは貧乏だ」などの言葉を投げかけられました。これは明らかにアジアに対する偏見です。中国を例に挙げると、経済成長率は世界でもトップであり、工業技術、芸術の面でも世界的にレベルが高く、私たちの身の回りには中国から来たものが多くあります。また、日本にとってとても大切な存在であり、中国という国がなくては日本が成り立ちません。

無知が原因で偏見をするのなら、知ってもらえばいいのです。そこで私は教育に視点を置きました。現在の日本では、外国の事情を勉強する教科として地理と世界史があります。しかし、私たちは主にテストや入試のために勉強しており、これでは現在の世界を理解するというのは難しいでしょう。

そこで私が提案する解決策は、【世界 -World-】の授業を行うことです。小学1年生から高校2年生までの11年間、週に1時間行います。地理や世界史など、従来の授業では知ることのできない本当の世界を知り、世界中と関係を作る授業です。例えば、音楽を例に挙げてみると、各地域の伝統楽器、民謡などは音楽の授業で多少習いますが、いつ、誰が、どこで、何の目的で演奏するのか、専用の楽譜はあるのかなど、みんなが素朴に疑問に思うことは詳しく習いません。このような疑問や関心を、食生活、気候、季節のイベント、言葉、文化や生活の様子、習慣など自分たちが実際に知りたいこと、体験してみたいことをテーマに設定して、生徒に自主的に活動してもらいます。

なぜ今までこのような授業がなかったのでしょうか。グローバル化の大切さが広く謳われている現在、私はこの必要性を大きく感じます。この授業をするための教科書やワークブックを作るのは、確かに簡単ではないでしょう。しかし、時代は変わっています。タブレット端末や電子黒板などのインターネット環境が、学校の教室にも普及し始めています。インターネットは世界中を結びつける重要かつ簡単な手段となりました。こういった技術が進むことによって、世界に関心を持つきっかけと少しの英語力さえあれば、世界中から多くの情報を入手することが可能であり、さらに情報を瞬時に交換することも可能となります。こういった環境での教科書の必要性は今ほど重要ではなく、生徒たちが自分自身でそれぞれのテーマで活動を行うというように、自分たちでいろいろ調べながら進めていくことができます。

私はこの【世界 -World-】の授業で、生徒の自主性も伸ばしていきたいと思いました。小学校低学年ではまず、世界にどんな国があるのかを知ることから始まります。言葉や気候の違いについて先生に授業をしてもらうところは従来と同じです。ただし、新しいことを学び始める際には必ず生徒に答えを想像してもらい、自分で考えてみることを重視します。テーマが終わるごとに、全員が自分たちのグループで作ったポスターなどを使って考えをみ

んなの前で発表することによって、小さいときから人前で自分の意見を伝える楽しさや積極性を身に付けることもできるのではないでしょうか。

小学校高学年では、外国語には英語以外にもあるのか、見た目の違いはどうして起こるのか、どの地域にどういった特徴があるのかなど、低学年の時よりもさらに具体的に学んでそれぞれが発表します。また、グループに分かれ、1つの国について調べ、最後の発表会にはその国の人になりきってもらい、ほかの生徒と接する活動を考えました。先生にも1人で発表してもらい、生徒から評価してもらうのも面白いでしょう。中学1年生では世界情勢などを自分たちで調べ学習をし、発表し合って現在の世界や社会についての知識を深め、次の学年からの交流プログラムに向けた生徒同士のシミュレーションを行います。

授業の最終段階は、中学校2年生から高校2年生までの4年間で行う、世界各国との交流プログラムです。4、5人のグループを作り、1カ月間である国の1学校の1グループとプログラムを共同で行っていきます。同じクラスのメンバーでも、それぞれのグループによって違う国の人とつながりながら活動をしていくことになります。1カ月ごとにクラス発表会を行い、自分たちがその1カ月間で活動したことをお互いに学び合います。40人を1クラスと考えると、1カ月で8カ国（学校）、1年（約10カ月）で80カ国、単純計算で行くと4年間で320カ国の世界中にいる中学2年生から高校2年生に当たる年代の人とともに学べるということです。このプログラムの目標は、交流をするグループ同士での相互理解を深め、生徒同士の交友関係にもつながることで、どこかの国に自分と同世代の友達ができるという期待が授業に対するやる気にもつながることです。

交流テーマはそれぞれのグループで話し合って決めてもらい、テレビ電話などを使ってオンラインでまずは自分の国に関するプレゼンテーションをし、共通のテーマに対するディベートなどを行います。小学校の時からの経験がここで活きてくるのです。また、授業以外でもメールでの意見交換や個人的な交流などをすることによって、英語力の向上や世界中の人とつながっているというリアルな交友関係は、時間が経つにつれどんどん増えていきます。知り合いがいることやこれまでの知識により、差別や偏見の芽は減っていくでしょう。

このプログラムを実行するには、国連やユネスコなどの機関の協力も必要です。言葉の壁ももちろん出てくるでしょう。授業中に話し合いをするときは、よりスムーズにするためにNGOを新しく設立し、グローバル企業からの支援といった形で通訳派遣をしていただいたり、Googleに最先端の自動翻訳を依頼して、各学校の電子機器に無償か格安の値段で提供してもらえる可能性もあります。テレビ電話などの世界をつなげるオンライン技術は、マイクロソフトやAppleといった世界的にも大手の会社に交渉し、ディベート用のテレビ電話機能などの開発も依頼してみてはいかがでしょうか。

それで問題がすべて解決するのかどうかは断言することができません。しかし、小さいことを少しずつ時間かけて積み上げていくことによって、世界は変わっていくと信じています。

［受賞者インタビュー］

互いを知らないことから偏見は生じる ドイツに留学して感じたことまとめた

――コンテストに応募した理由、きっかけは？

留学から帰ってきた私に、先生が「書いてみないか」と勧めてくださいました。

――論文を書き上げるまでにどのくらいの時間がかかりましたか？

構成を考える段階からだと、約1週間です。

――この論文を書く上で苦労したことは？

3,000字という字数制限にとても苦労しました。

――この論文を書いたことで良かったことはありますか？

自分の考えを明確に文字として表すことができ、また、受賞して多くの方と知り合えたことがとても良かったです。

――今、どんなことに興味を持っていますか？ どんなことをしている時間が楽しいですか？

医療、国際社会、外国語に今はとても関心があります。部活動（吹奏楽）をしている時間がとても楽しいです。